“X is attributed Y” 構文についての一考察

金 子 輝 美

0.目的

他動詞 attribute が受動文で用いられた例としては、His success is attributed to his teacher. のような表現が一般的である。この小論では、それと形式と意味を異にする “X is attributed Y” 構文に焦点を当てる。この構文は、筆者の知る範囲では、まだ国内外の辞書類には載せられていないように思われる。attribute, ascribe などと典型的授与動詞 give との間にある意味的共通点に着目し、この構文がなぜ生じるのかについて、実例に基づいて若干の考察を試みたい。

1. 受動構文 “X is attributed (ascribed) Y” の実例

表題のような attribute, ascribe の受動文は、ラネカーはじめ他の学者の著作に散見される。impute は、この種の受動構文での使用例は得られていない[1]。

(1) a. I believe that every grammatical marker <u>is</u> properly <u>attributed</u> some kind of meaning, however tenuous it might be. (Langacker 1991 : 522)

b. ...., while a CWO sentence containing a deictic adverb can <u>be attributed</u> a truth value,.... (Dorgeloh 1997 : 72)

c. .... if they allowed their component words or symbols to <u>be attributed</u> new and unstipulated meanings in certain contexts. (Cohen 1993 : 59)

(2) a. ....even *of* – the English preposition for which such an analysis seems most plausible – can in fact <u>be ascribed</u> a semantic value, one that motivates its grammatical behavior. (Langacker 1999 : 483)

b. That the submissive subject <u>is ascribed</u> a capacity for outcome, but not necessarily agenda, ... (Klaiman 1991 : 145)

例文(1), (2)は基本的には「XにYが与えられている」、すなわち「XはYという属性を帯びている」という意味である。因みに、(1a) の主要部は「あらゆる文法標識には、たとえ微弱であっても、何らかの意味がそれなりにあるものだ」という意味である。この構文で「与えられるもの」としては、抽象的なものが多く、meaning, import, value, content, structure, characterization, capacity などがある。

2. “Y is attributed to X” 構文が表わす 2 つの意味

“Y is attributed to X” 構文を用いた英文の表わす意味は、大雑把な言い方をすれば、次のように 2 つに大別される。

(3) This semantic shift <u>is</u> commonly <u>attributed to</u> spatial metaphor, ...
(Langacker 1990 : 149)

(4) ...., volitionality is factored out, being attributed only to Fred, ...
(Langacker 1991 : 291)

(3)は「このような意味変化は空間メタファーによって通常引き起こされる」という意味であるから、因果関係を表わしていると言える。一方、(4)は「意志をもつのはフレッドだけである」という意味で、所属関係を表わしている。しかしながら、このような(3)と(4)の区別は必ずしも判然としない場合がある。これは、attributeに特有の含意などを考慮に入れると、むしろ当然のことであろう。さらに2例を加え、このことを確認しておきたい。

(5) a. Take the loyalty we attribute to dogs and the courage we attribute to lions.
(Lakoff and Turner 1989 : 194)

b. Understanding whether differences in mental capacity or intellectual ability can be attributed to gender has long confounded scientists, parents, equal rights activists and educators. (*International Herald Tribune*, 11／30／2000)

(5a)は、犬とライオンの属性についてどのように私たちが思っているかを述べている。「犬には忠実性、ライオンには勇猛さが備わっている」という所属関係を意味し、(5b)は「知能や知力の違いは性別によるのかどうか ....」と解釈すれば、因果関係である。しかし、「能力の 差異は男女の属性」、すなわち「男女が異なる能力をもっている」と解釈すれば、所属関係である。「属性」と「原因結果」には意味的連続性が認められる場合があると言えよう。

(6) a. He attributed intelligence to his colleagues. (*RHD*[2] 1987)
b. No fault can be attributed to her. (ジーニアス大英和 20001)
(7) This play is usually attributed to Shakespeare. (*OALD*[5] 1995)
(8) She attributes her success to hard work and a lot of luck. (同上)

繰り返しになるが、(6)は所属関係、(7)は作品と作者の所属関係、(8)は因果関係を表わしている。*OED*[2] (1992) は、attributeの語義として "Assign, give, or concede to a person as a right" を一番最初に載せていることからも、(6)から(7)を経て(8)へと意味拡張がなされたと考えることができる。これを図示すると次のようになる[2]。

(6)の例文　Y（属性）をX（主体・本体）に与える、属させる　空間的帰属　所属関係
↓
(7)の例文　Y（作品）をX（作者）に属させる　空間／時間的帰属　所属関係
↓
(8)の例文　Y（結果・状況）をX（原因・理由）に帰属させる　時間的帰属　因果関係

外界のさまざまな事象をカテゴリー化し、それらの関連性を求めていく能力を人間はもっていると言われる。「空間という認知領域から抽象概念の認知領域への移行に際して、人間は状況を時空中に存在する個別の存在物、つまり物体として見立てる」という指摘を高橋（1993 : 160, Lakoff and Johnson 1980 : 25-29）がしているように、抽象概念の移動も「～に～を与える (give)」という人間の具体的な身体活動の経験を基盤にして生まれた表現なのである。なお、因果関係を表わす動詞で、attribute, ascribe, imputeと同じような意味と用法を発達させているものにassignがある。例えば "assign one's failure to one's poverty"（失敗を貧乏のせいにする

－『ジーニアス英和』）のように、assign にも「～を～に与える」から「～を～に帰する」への意味的移行が見て取れることは注目されるべきである。

3．attribute と give の共通点

attribute には、(9a)に対応する(9b)の形式はありえないので、この動詞を授与動詞と呼ぶことはできない。

(9) a．We attribute intelligence to the man. (= We think the man is intelligent.)
　　b．*We attribute the man intelligence.

プロトタイプ的授与動詞としては、まず give を挙げるのが妥当であろう。give の授与動詞としての特徴を記述したものとしては、例えば「主語が移動せずに、直接目的語を間接目的語のところへ移動させるが、その移動や移動するものが必ずしも物理的でない動詞」(天野 1998 : 21) がある。give は最も一般的に使われる基本動詞で、意味や用法は多岐にわたるが、その中で授与動詞としての用法が大きな位置を占めていると思われる。極めて単純化して言うならば、[(give Y to X) → (give X Y)] と [(attribute Y to X)] がその意味を基盤にして重ね合わされる結果、(10)のようないわば擬似的な授与表現が生じるのではなかろうか。

(10) a．Recall that *Jill's* was analyzed as profiling a relationship in forms like *Jill's knife* (Figure 4). I would also attribute it relational value in predicate position following *be* ... (Langacker 1995 : 70)
　　b．An initial problem is to determine what meaning a gender marking has when it occurs on an adjective. The most desirable solution would be to attribute it the same meaning it has with a noun, ... (Langacker 1991 : 187)
　　c．Neither approach accords a central role to *'s* and *of* or attributes them any semantic content – they are assumed to be empty markers inserted for purely grammatical purposes. (Langacker 1991 : 35)

この種の表現は、現在までのところ、ラネカーの著作にだけ発見される数少ない例である。間接目的語が it や them のような代名詞の場合に限り見られるものである[3]。旧情報を担うこれらの代名詞は、(10)の各例文では to を伴わないという点で、着点が強く意識されず、音声上でも弱形になるはずである。attribute は授与動詞ではないが、give を用いた二重目的語構文に動機づけられ、attribute の give に近い意味的側面に焦点が当てられることによって生じた表現であると言えよう[4]。

4．受動構文 "X is ～ ed Y" の特徴

例文(1)、(2)に見るように、"X is attributed (ascribed) Y" 構文は、Xがどのような属性をもっているかに焦点が当てられた表現で、Xの状態が客観的に述べられている。この構文では、いわゆる動作主 (by Z) は言語化されないことが多い。この種の受動構文のプロトタイプは give を用いた構文で、その周辺には同じイメージ・スキーマで結ばれたいくつかの受動文があると考

えられる。

(11) a. He was given the book.
b. He was accorded permission to use the car. (ジーニアス大英和 2001)
c. He was granted amnesty and released. (同上)
d. He was offered a good job.

(11)の受動文はすべて容認されている。その判断基準は、その動詞が能動文において2つの目的語をもちうるかどうかである。この基準に抵触する動詞の容認度は低い傾向がある。

次例の動詞はいわゆる授与動詞ではない。各例がどの程度まで容認されるのかを概括することはかなり困難である。厳密さを欠くのを承知の上で、便宜的に？と＊を付してみた。

(12) a. ?The Red Cross was donated a lot of money.
b. ?The editor was contributed an article for his magazine.
c. ?The girl is imputed magical powers.
d. *He was transmitted AIDS.
e. *He was banned admittance to the club.
f. *He was bribed a lot of money.

受動文は一種の有標表現であり、日常会話の中で使われることはそれほど多くない。また、上掲の表現に代わって、例えば(c)ならば、The girl has magical powers. というように、別のより確実で平易な表現方法が存在するからでもある。受動構文に散見されるラネカーたちのこの種の用例は、一般社会の日常会話表現とはかけ離れた文語表現である。表題の構文や(12)の表現については、英語を母語とする大学講師たちをインフォーマントにして、ささやかな調査を試みたが、"X is ～ed Y" 構文に親近感をもたない回答者が多かった。したがって、容認度に関しては概して明確な反応は得られなかった[5]。

次例(13), (14)は、新しい表現として受け入れるべきだろうか。筆者としては、正誤の問題ではなくて、give の受動文からの類推によって起こる言語現象として、このような実例が存在すること自体を人間の自然な認知能力の現われであると捉えたい。

(13) For example, in a game of chess in which one piece is missing, an eraser may <u>be conferred</u> the "meaning" of a rook. (Kövecses and Radden 1998 : 43)
cf. *The scientist <u>was conferred</u> knighthood <u>on</u> by the Queen. (鷲尾 1997 : 25)

(14) We might rephrase this point by saying that since women are not expected to make decisions on important matters, like what kind of job to hold, they <u>are relegated</u> the noncrucial decisions as a sop. Deciding whether to name a color 'lavender' or 'mauve' is one such sop. (R.Lakoff 1974 : 8, [堀内 1987 : 157])[6]

清水 (1997 : 291-313) は、Larson (1988 : 335-391) を引きながら、二重目的語構文だけに参加しうる動詞には、spare, envy などがあり、その逆にいわゆる与格構文に使われても、二重目的語を取らない動詞として donate, distribute, contribute などの例文を示しているが、attribute, ascribe には言及がない。ここでは、distribute と donate の使用例（容認度の記号もそのまま）を借用しておきたい。

(15) a. I distribute the apples to the children.
b. (*)I distributed the children the apples.
c. ?The children were distributed apples／gas masks.（清水 1997：297 [Larson]）

(16) a. I donated money to the charity.
b. ??I donated the charity money.
c. The charity was donated money.（同上）

(15)で「興味ある点は、bとcを完全に＊としない母語話者がいるということである」という指摘があるように、微妙な言語現象がすべて理論的に予測されるとは限らないという点で興味深く感じられる。(16c)は（12a)に類似した例であるが、筆者の調査では(12a)に疑問符を付ける回答者もいた。この種の受動文の使用頻度が少ないことが、その容認度に一層揺れを生じさせているのかも知れない。

5．まとめ

"X is attributed Y" 構文は、Xがどのような属性をもっているかに焦点が当てられた表現で、Xを中心にしてその状態が客観的に述べられているが、能動文の方は話者の考えや判断を含む主観的表現である。この受動構文はプロトタイプ的構文 "X is given Y" によって動機づけられたもので、その背後に give と attribute が本来もっている意味の中の共通部分「～に～を与える」のイメージ・スキーマがあると思われる。この結果、attribute が元来他動詞として語彙的に取り得る項とは別に、一種の構文スキーマ "X is ～ed Y" によって独自に与えられる項をもつことになった。同時に、"attribute Y to X" 構文がもつ「～を～に帰する」という意味的側面（因果関係）は、この受動構文では排除されることになった。

"X is attributed Y" 構文は生産性をもつ。give に類似した意味をもつ動詞をできるだけこの構文の中に誘引して、表現を豊かにしていこうとする傾向が見られるが、その反面では、言語表現が無軌道に膨張していくのを防ごうとする意識や願望もあるようだ。語法の容認度に揺れが生じる原因はいくつかあろうが、その１つとして、その語法が他の容認された語法と共有しうる表現スキーマをまだ十分確立していないことが挙げられる。

（補注）

＊ 本稿のテーマは、1997年４月18日、本学文学部教授堀内俊和先生が大学院英語学特殊講義Ｉで、Langacker（1991）の文献中のこの構文の特異性に注目され、先生御自身の疑問として私ども受講生に問いかけられたのが出発点になっている。その後、学期末のレポートなどを通して懇切な御指導をいただき、2000年11月17日に英語語法文法学会第８回大会の語法ワークショップ（大阪樟蔭女子大）で「"X is attributed Y" 構文の特徴」を口頭発表する機会を得ることができた。本稿はそれに修正を加えたものである。それにしても、忘れもしない2001年２月27日夜、先生が忽然として永遠の旅立ちをされたことは痛恨の極みである。先生は理論研究に加えて、それと相補的関係にある種々の言語現象に鋭い関心を寄せておられたことが印象的である。先生の御霊に謹んでこの小論を捧げたい。なお、本稿の不備は、当然のことながら、すべて筆者の責任である。

＊＊ 引用文の下線はすべて筆者によって施されたものである。

1. impute の用例としては、"..., since conceptual import is imputed to the subject and object relations."（Langacker 1991：411)、すなわち "Y is imputed to X" 構文はあるが、これとほ

とんど同じ内容でありながら、構文が変わると、"....and when the subject and object relations are themselves attributed conceptual import." というように、Langacker (1991 : 398) は impute ではなくて attribute を用いている。

2. attribute のこのような意味拡張の過程についての分析は、畏友山本幸一氏（愛知教育大学附属高等学校教官・同大学非常勤講師）に負うところが大きい。
3. to them のように to を伴う例も、もちろん散見される (Langacker 1987 : 404)。
   There is nothing, for example, in the meaning of *tree* that saliently evokes the speech act participants or attributes to them any specific properties;....
4. 堀内俊和先生は、御著『英語の表現と語法』(1999) の終章で、attribute が代名詞＋名詞句という 2 つの目的語を取るラネカーの語法に触れ、「いわゆる授与動詞 give からの類推による拡張表現であろうが、この構文が attribute に慣習化するかどうかは今後の問題であると思われる」と述べておられる。
5. インフォーマントの反応はさまざまで、統一的見解を得ることはできなかった。"X is attributed with Y" というように with の使用を求める人、自ら "God is attributed some kind of property". を示し「微妙なところだ」と答えた人、(12e) の banned に代えて debarred,denied を用いるなら O.K.であり、別の表現を用いると He was banned from entering the club.になるというコメントなどが印象に残った。また別のインフォーマントは、(12c) は She is imputed with magical powers.、(12f) は He was bribed with a lot of money. というように、with の挿入を主張した。彼等は、私たちとは違って、いわゆる「規範的文法」を意識していないので、時には規範からの逸脱が見られる。なお、She is attributed intelligence (loyalty, elegance, something elegant). のような人間の属性に関する表現を認める回答者はいなかった。
6. 堀内俊和先生の『わたしの「英語学」』(増補改訂 19872 : 153-165) には、「XI章 2 つの目的語をとる動詞」として、attribute, sell, relegate の用法についての詳しい論考がある。その中で、attribute の用法に関して、"He is also attributed with the introduction". (Marilyn E.Stevens, *Nagoya Sketchbook* 1978;28、弓書房) のように前置詞 with を伴う例を挙げ、これは be credited with のような表現との混同または類推によって生じたものであるとしているが、本稿のテーマである "X is attributed Y" 構文には触れていない。二重目的語構文については、該当する多くの動詞を挙げ、それらを 3 つの型に分類し、それらの相互関係を論じている。さらに、受動文 "The children were explained the problem". (Quirk *et al.*1972 : 157) の容認度にも関心を示しておられる。なお、「まとめ」としての記述の中で特に示唆的なのは、次の部分である。

   > こうして、一見、何の関連もないような attribute, sell, relegate の用法の間にも、共通の接点が見出されるように思われる。(p.165)

   これは、この種の動詞の用法がどのように構造化されているのかを解明するための 1 つの手がかりになりうるものである。

参考文献（引用文献を含む・辞書類は除く）

天野政千代 (1998) 『英語二重目的語構文の統語的構造に関する生成理論的研究』、 英潮社

Cohen, L. Jonathan (1993²) "The semantics of metaphor" in *Metaphor and Thought*, edited by A. Ortony. University of Chicago.

Dorgeloh, Heidrum (1997) *Inversion in Modern English*. John Benjamins.

Goldberg, Adele (1995) *Constructions : A Construction Grammar Approach to Argument Structure*. University of Chicago.

堀内俊和 (1987²) 『わたしの「英語学」』(増補改訂)、中部日本教育文化会

_____ (1999) 『英語の表現と語法』、中部日本教育文化会

Johnson, Mark. (1987) *The Body in the Mind*. The University of Chicago.

Klaiman, M. H. (1991) *Grammatical Voice*, Cambridge University.

Kövecses, Zoltán and Günter Radden (1998) "Metonymy : Developing a Cognitive Linguistic View" in *Cognitive Linguistics vol. 9-1*. Mouton de Gruyter.

Lakoff, Goerge and Mark Johnson (1980) *Metaphors We Live By*. University of Chicago.
Lakoff, Goerge and Mark Turner (1989) *More than Cool Reason – A Field Guide to Poetic Metaphor*. University of Chicago.
Lakoff, Robin (1975) *Language and Women's Place*. Harper & Row.
Langacker, Ronald W. (1987) *Foundations of Cognitive Grammar vol. 1 – Theoretical Prerequisites*. Stanford University.
_____ (1990) *Concept, Image, and Symbol*. Mouton de Gruyter.
_____ (1991) *Foundations of Cognitive Grammar – Descriptive Application*. Stanford University.
_____ (1995) "Possession and Possessive Constructions" in *Cognitive Construal of the World*. Mouton de Gruyter.
_____ (1999) "The symbolic nature of cognitive grammar : The meaning of *of* and of *of*-periphrasis" in *Thirty Years of Linguistic Evolution – Studies in Honour of Renê Dirven on the Occasion of his Sixtieth Birthday*, edited by Martin Putz. John Benjamins.
Larson, R. (1988) "On the Double Object Construction" in *Linguistic Inquiry 19*.
Levin, Beth and M. Rappaport Hovav (1992) "Wiping the slate clean : A lexical semantic exploration in *Lexical & Conceptual Semantics*, edited by B.Levin and S.Pinker. Blackwell.
Quirk *et al*. (1972) *A Grammar of Contemporary English*. Longman.
清水真一（1997）「二重目的語構文についての覚書」(『人間科学』12号)、桃山学院大学
高橋美弥子（1993）「英語の前置詞と因果性」(『金城学院大学論集』英米文学編 35号)、金城学院大学
山梨正明（2000）『認知言語学原理』、くろしお出版
鷲尾龍一（1997）「他動性とヴォイスの体系」(共著・三原健一『ヴォイスとアスペクト』)、研究社出版